

PHAYAO レポート 2025-02 (山岳民族支援奮闘記転載)

転載記事：「タイ・バンコク発の情報メディア DACO ダコ」に掲載されました。

“エコトイレ”から始まる豊かで明るい未来一。

元県庁職員による北タイの山岳民族支援奮闘記【1】

Contents

- 1 ダムと雨と、42 年。技術と対応力を身につけた県庁職員時代
- 2 気楽に参加した サークル活動で“見てしまった”
- 3 運命を変えた“講演会”
- 4 初めての海外支援で訪れた モン族の村でまたも“見てしまった”



「見てしまったんですよ。だから、始めるしかなかったんです」。そう語るのは、約 30 年前から無給でタイ北部の少数民族の村に通い、自立支援のボランティアを続けている佐伯昭夫さんだ。現在は定年退職しているが、もともとは山口県の公務員として長年勤めていた。

そんな彼が、ある“ひょんなきっかけ”から個人的に北タイの村と関わるようになり、衛生環境の改善に取り組みはじめる。そしてやがて、排泄物を堆肥として再利用する「エコトイレ」を、住民たちと共に作り上げることになる。さらに、遺伝子組み換え作物によって荒れていた畑を、コーヒーや果樹など低農薬の作物へと切り替えたり、刺繍を通じて女性たちの自立を後押ししたりと、暮らしの中に寄り添う多角的な支援を続けている。では、そんな佐伯さんが冒頭で語った「見てしまった」とは、一体なんだったのか。北タイの小さな村で、ひとり黙々と支援を続ける彼の、静かで熱い物語を紹介したい。



ダムと雨と、42 年。 技術と対応力を身につけた県庁職員時代

山口県に生まれた佐伯さんと北タイとの縁は一体どこで生まれたのか。大きな始まりは、高校時代から始まっていたのかもしれない。戦後の高度経済成長期。重工業の発展に伴い、様々な機械を自動的に動かすオートメーション技術が求められるようになっていた時代。その技術者を養成する新設高校で学び、卒業後は「技術があるんだから、電気屋さんとして自分で商売したい」と考えていた。しかし、先生の勧めでなんとなく受けた県庁の

職員採用試験に合格し、山口県庁の技術職員として働き始めた。「試験に受かったし、まあ、ちょっとだけやってみるか」と、軽い腰掛け気分だったものの、気づけば 42 年間、定年まで勤め上げるようになった。

最初に配属されたのは、ダムと併設している発電所、つまり水力発電所を管理する部署。「雨が降ったら、眠れなくてねえ」と笑いながら話すが、それは決して比喻ではない。水が多ければ多いほど発電できるわけだが、かといって雨が降りすぎても困りものだ。降雨量に応じてダムの水位を調整しなければならない。溜めすぎれば洪水になり、放水しすぎれば農業用水が枯渇する。発電で利益を上げることと、地域住民の安全とを両立させるため、24 時間体制での判断が求められた。「下流で人が釣りをしてるのに放流したら命に関わるし、農家が困る水を出してしまっても大問題になる。自然相手ってのは、本当にしんどい仕事なんです」ダムのゲート操作ひとつで人の命が左右される。そんな責任の重さに押しつぶされそうになりながらも、佐伯さんは日々を「面白かった」と振り返る。そして、この頃に身に着けた臨機応変な対応力が、後に没頭することとなる北タイの村でのボランティア活動に生きることになる。

気楽に参加した サークル活動で“見てしまった”

そんな仕事にもすっかり慣れてベテランとなった 30 代後半。それまでの 24 時間対応が迫られていた現場から外れ、心身ともに余裕ができた佐伯さんはふと空いた時間に「手話サークル」に顔を出すようになった。それは、山口県庁内の職員サークルのひとつだった。「最初はほんと、軽い気持ちだったんです。体も頭も使わんし、時間ができたのでね。2 人くらいしかいないサークルだったんですけど、ボランティア活動というか手話を勉強していたんですよ」ところがある日、サークルを通じて「障害児と健常児の交流キャンプ」のスタッフを募集している

という話が舞い込む。1981 年、国連が定めた「国 DACO 際障害者年」をきっかけに、全国各地で始まった取り組みの一環だった。障害のある子どもと健常の子どもが同じ施設で過ごし、遊び、寝食を共にする 3 泊 4 日のプログラム（ノーマライゼーションの理念に基づく“こどもジャンボリー”）。障害のある子どもひとりに対して、大学生や高校生ボランティアが 2～3 人つききりで介助にあたるという本格的な構成だった。「ここで初めて、見たんですよ。日常は、健常児との接触が乏しい養護施設の子どもたちと健常児の交流。“当たり前のひととき”に多くのボランティアが楽しく見守っている笑顔を見た。薬の管理、食事の介助、夜間の徘徊対応……、とにかくひとときも目を離せない子どもたちの対応や子どもたち同士の献身的な対応。キャンプの終わりに子どもたちが見せてくれた笑顔が、心に焼きついた。「見てしまった以上、放ってはおけない。子どもたちの状況を見てしまった以上、どうにか改善してあげたい、関わるしかないと思ってしまったのですよね」。佐伯さんは、この体験をきっかけに活動を継続。このキャンプに関する県の支援が終了した後も、すぎのこ大学という団体を立ち上げ、障害者支援やボランティア学習を続けていくことになる。

運命を変えた“講演会”

すぎのこ大学では毎年数人、様々なボランティア活動を行う講師を招いて講演会を開き、関心のある聴衆を集めて共に熱心に勉強を行ってきた。そして、講師の一人として招いた有馬実成師が、佐伯さんの人生の方向を大きく変えた。有馬師は、山口県の曹洞宗原江寺の住職。戦時中の朝鮮人労働者の遺骨返還運動から始まり、ベトナム戦争後にはタイ国境の国連難民キャンプ支援にも参加。日本で初めてカンボジア難民キャンプに人を送った民間団体（現：（公社）シャンティ国際ボランティア会）を立ち上げた人物でもある。「誰でも、やろうと思えばできるんですよ」と語る有馬師の活動に深く感銘を受け、背中を押された佐伯さん。「自分にも人のために役立つ何かができるのかもしれない」と、1990 年に入会したのが、「曹洞宗ボランティア会 山口県支部」。当時からカ

ンボジア難民支援、タイ・バンコクスラム、東北タイの教育・生活支援など、先駆けていた。1993 年に有馬師によって山口県支部が独立し、現在、佐伯さんが事務局長を務める「シャンティ山口」へと生まれ変わった。



シャンティ山口では大学生たちへのスタディーツアーも開催。レクチャー中の佐伯さん

初めての海外支援で訪れた モン族の村でまたも“見てしまった”

「シャンティ山口」が独立して最初の支援を始めたのは、ベトナム戦争で難民となったモン族の人々の支援活動。1994 年、佐伯さんは生まれて初めてタイ北部の山岳地帯に暮らす、モン族の村を訪れた。当時の年齢は 49 歳、これが人生で初めての本格的な海外ボランティアとなった。「すでにシャンティ山口の前身時代から、食糧問題、保健衛生などを解消するための活動はすでに行われていたんです。私が行ったのはその活動が始まって 3 年目くらいの時期ですが、実際に行ってみたら、村の暮らしは想像以上に過酷でした」。子どもたちは栄養失調でお腹が膨れ上がり、皮膚には化膿したできもの。大人たちも痩せこけていた。タイ政府から国籍を与えられたばかりの元・難民たちが、与えられた荒れ地に村を築き始めていた頃だった。「びっくりしましたよ。ここでも、また“見てしまった”と思ったんです」。

見てしまった以上は関わるしかない。そう腹をくくった佐伯さん。当時はまだ県庁職員だったが、年に2回、有給と休日を使って村を訪れ続けることになった。村に提供するようなお金はない。でも、彼らにとっては何が一番必要なのか、どうすれば“援助ではなく共に生きる”という形ができるのか。佐伯さんの試行錯誤の日々が、ここから始まっていく。



プラチャーパクディー村の保育園 ・ パンカー村の保育園。たくさんの子供たちがここで学ぶ

※[【2】](#)へ続く。(取材・文／平原千波)

“エコトイレ”から始まる豊かで明るい未来一。元県庁職員による北タイの山岳民族支援奮闘記【2】

• 2025/9/1

Contents

- 1 潤沢な寄付などない。村の自立のために考え抜いた支援の形
- 2 トイレが詰まると、命が詰まる 村に迫る衛生の限界
- 3 与えるだけの支援はもう終わり 突然閃いた“日本の肥溜めと畑”
- 4 最初は拒否反応を示した村人たち。一緒に作り上げた先に見たものは？
- 5 「自分たちでできた」エコトイレがくれた自信



潤沢な寄付などない。 村の自立のために考え抜いた支援の形

ボランティア団体「シャンティ山口」の活動の一環で、ベトナム戦争の影響で逃げてきたモン族の人々が住む北タイの山岳部の村を訪れた佐伯さん。ひどい衛生面、栄養失調の子供たちなど、過酷な暮らしをその目で見てしま

ったことで「これはどうにかしないといけない」と、山口県の県庁職員として勤務する傍ら、有給や休日をうまく使って年に2回ほど村へ通って支援する活動が始まった。実はモン族の多くは、精霊信仰のほかにキリスト教を信仰している。佐伯さんが最初に支援に入った村には、なんとプロテスタント、カトリック、それぞれの教会が三つも建っていた。それはなぜか。「キリスト教の人たちが、モン族を支援するために井戸を掘り、水道を整えていたんです。お金を出してくれて環境を整えてくれるのなら、その見返りに信者になるというのは当然といえば当然かもしれません。ですから、私たちが支援に入ったとき、村の人たちから最初に言われたのは『あなたたちは、この村に何を寄付してくれるの?』ということでした」

当時、個人で資金を積み立てた上で、その利子をボランティア活動に使えるという郵政省の「ボランティア貯金」という金融商品があった。佐伯さんたちの主な活動資金は、その利子と寄付金だった。そんなわけで潤沢な資金があったわけではなく、「お金を寄付しての支援」という形には限界があった。また、単に与えるだけの支援では、結局根本からの状況を変えることは難しい。では限られた資金の中で、自分たちが村人たちのために一体何ができるか? 真剣に考え抜いた先の答えは“農業の知識”を伝授すること。「農業の知識を共有すれば、米や野菜、果物を育てて、自分たちで食べられる。それによって栄養の改善にも繋がるし、売って収入を得ることもできる。そうやって自分たちで自立することこそが、何よりの財産になるんじゃないかと考えたんですね」 こうして、支援が本格化していった。



野菜が見事に育つ村の畑。今では自給自足がすっかり根付いている

トイレが詰まると、命が詰まる 村に迫る衛生の限界

モン族の村に支援に入っていた、とある雨上がりの朝のこと。子供たちがキャッキャッと遊んでいた。地面にできた小さな水たまりをぺちやぺちやと踏みながら、裸足で駆け回り笑い転げる牧歌的な風景が目に入ってきた。

「微笑ましいなあ」と思ったのはほんの一瞬のこと。次の瞬間、佐伯さんの脳裏に衝撃が走る。「あれは水たまりじゃない！ 排泄物じゃないか！」 前日までの豪雨でトイレの浄化槽が溢れ、汚物が地表に吹き出していた。

その上を、幼い子供たちが無邪気に跳ね回っていたのだ。タイの農村では、簡易トイレの多くが「土に染み込ませる」方式。コンクリート製の丸い枠を地面に埋め、その中に排泄物をためる構造だ。底にはフタがない。通常は浸透して消えていく。しかし、村にあった3基の共同トイレは、すでに限界を超えていた。つまり土に「浸透しな

い」のである。 3年、4年と使い続けた結果、底に汚物が溜り浸透しなくなり汚物があふれてしまうというわけ

だ。雨が降れば溶け出し、あたり一面が“危険地帯”になる。「それを、子どもたちが踏んどる。そりゃあ、もう

.....震えましたよ」 衛生どころの話ではない。感染症、皮膚病、栄養失調の悪化.....このままでは命に関わ

る。トイレがないということは、単に不便という問題だけに留まらない。 当時、村では脳性まひの子どもが3~4

人いた。初めは「なぜ、こんなに多いのだろう」と思っていた。遺伝？ 出産時の問題？ 医療不足？ しかし佐伯

さんは、ある仮説にたどり着く。「もしかして.....水？」 村に産科はない。病院も遠い。妊婦はそのまま自宅で

出産することが多い。当然、衛生環境は全く整っていない。そして、あのトイレ事情だ。不衛生な水や排泄物に

長くさらされていれば、妊娠中の母体にも、出産直後の新生児にも多大なリスクをもたらす。「汚れた水に、命

がやられている。そう思ったんです」



佐伯さんが支援するホイブム村の子供たち。「子供たちの笑顔を守りたい」という思いからエコトイレの構想が生まれた

与えるだけの支援はもう終わり 突然閃いた“日本の肥溜めと畑”

冒頭で述べたように、すでに村では他のキリスト教系支援団体によっていくつかの井戸が掘られていた。設備も、材料も、業者もすべて外から提供されたものだった。「でもね、結局メンテナンスできないんですよ。知識がないから」水が出なくなっても、誰にも直せない。タンクが壊れても、交換の仕方が分からない。お金もない。だから「壊れたら終わり」。使われなくなった設備が、草に覆われて放置されていた。「与えるだけの支援ってのはね、そこが限界なんですよ」当初、佐伯さんも幼稚園や給食センターを「作ってあげる」支援をしていた。だが、資金も人手も限られる。しかも、作っても維持されなければ意味がない。「これは、村の人たちが“自分で作れる”ものじゃないとダメだと、本気で思いました」そういった数々の自体を目の当たりにした佐伯さんに“自然循環式エコトイレ”というアイデアが浮かんだのは、そんな時だった。「子供の頃の思い出が頭をよぎりました。

小学校の頃から父親の農業の手伝いに明け暮れていたんですが、“ぽっとん便所”を思い出したんですよ」

“ぽっとん便所”とは、汲み取り式のトイレのこと。排泄物がいっぱいになると汲み取って家の周りにある野菜畑のそばにある“肥溜め”に運搬した。この排泄物は数ヶ月放置するとメタン発酵によって大腸菌をはじめとする病原菌がいない養分豊富な液体肥料と化す。そして、その液体肥料を肥やしとして野菜畑にまくと、おいしい野菜が育つのだ。「これだ このエコトイレシステムしかない!! と思いましたね。肥溜めの原理を応用すれば誰でも簡単にできるし、くみ取りもいらない上に、野菜の肥料になる。残留水は、外部には放流しない持続可能な自然循環式を採用すれば安全で衛生的な飲料水へと生まれ変わる。さらにガス収集タンクを追加で設置すれば、食事を煮炊きする燃料まで取り出せるんですよ」これらの方法なら地面に排泄物が染み出すことがないため、地下水が汚染されることはない。井戸水も安心して飲料として使える。不衛生なトイレが原因で起きていた伝染病や衛生問題もクリアできる。「これなら、いけるかもしれん」ただひとつの問題は村人たちを説得することだった。



ホイプム村の「老人の仲間入りセレモニー」での佐伯さん。今ではすっかり“村人の一員”だ

最初は拒否反応を示した村人たち。 一緒に作り上げた先に見たものは？

「そんな面倒なもん、作らんでええ！」最初にこの案を持ち込んだとき、村の人々は一斉に反対した。「トイレなんか今のままでいい」「外国のやり方を押しつけるな」。あげく、「それより何かくれ」と怒鳴る者までいた。

「お金がある団体は、井戸を掘ってくれる。水道を作ってくれる。そりゃあ、そっちがいいよね」

でも、佐伯さんは折れなかった。「いや、うちは何もあげられません。でも、一緒には作れます」 粘り強く話し合い、設計図を描き、材料費を見積もり、簡単な模型を作り、少しずつ理解を広げていった。

最初の 1 基が完成したのは、提案から半年後のことだった。

半信半疑だった村人も、出来上がった“異形のトイレ”に興味津々だった。試しに使ってみると……。

「全然、臭くない」

「虫がこない」

「畑の野菜がおいしい」

「保育園では給食の煮炊きにガスが使える」

「永久に汲み取りをしなくていい」

「装置の稼働に電気もいらない、エネルギーも使わない、何もしない全くの自然循環式」

評判は上々だった。「試しに作ってみたら、良かった」その一言が出たとき、「ああ、やっぱりこの形で良かったんだ！」と、佐伯さんは強く思った。

トイレを“もらった”のではない。“自分たちで作った”と村人たちが認識している。

使い方も構造も分かっている。メンテナンスもできる。これなら、続く。「支援っていうのは、こんなやり方で現地のコミュニティづくりから絆を深めることがいいのかなと思いましたよ」



清潔なトイレ、清潔な水道によって、元気にすくすく育つ子供たち

「自分たちでできた」 エコトイレがくれた自信

現在、村には数十基のエコトイレが設置されている。それらはすべて、村人自身が作ったものだ。農業で自給自足を始めて食が豊かになり、農作物の販売を始めて多少の余裕もでき、エコトイレの設置によって衛生面が飛躍的に向上。さらに、女性たちは刺繍グループを立ち上げ、自分たちの技術で財布や巾着を作り販売するようになった。子どもたちはタイ語を学び、読み書きができるようになり……。今や彼らは「支援を受ける村人」ではない。「未来を作っている人たち」なのだ。「トイレはね、ただの設備じゃない。きっかけなんですよ。自分たちでできた”っていう、最初の一步なんです」佐伯さんが導いた支援の形は、確実に良い形で芽吹き始めていた。次回は、その後の村の様子と現在の佐伯さんの支援についてお伝えしよう。



佐伯さんが支援する村のひとつサントイスク村にて。元気な子供たちがいっぱい

“エコトイレ”から始まる豊かで明るい未来一。元県庁職員による北タイの山岳民族支援奮闘記【3】

- 2025/10/1

Contents

- 1 針と糸に見つけた もうひとつの“自立の種”
- 2 「これ、かわいい！」の声 が 村の女性たちの心に火を点けた
- 3 タイ語が話せると、世界が広がる
- 4 どんどん広がる「小さな成功体験」と ポジティブな空気感
- 5 “いなくても大丈夫”を これからも見届けていく



・ 針と糸に見つけた

もうひとつの“自立の種”

「支援するってことは、一方的に“作ってあげる”ことじゃないんです。何が最善かを一緒に考えて、自立するために必要なものを一緒に作る。そうじゃないと、続かないですよ」

タイ北部の山岳地帯に暮らすモン族の村に通いはじめて、佐伯昭夫さんは 31 年になる。

村が本当に自立するためには、どうすればいいのか――。佐伯さんがたどり着いた答えは、「自分たちで食べるものを、自分たちで作る」ことだった。野菜や米、果物を育てて自給自足し、余った作物を売れば、現金収入も得られる。そんな農業の知識を伝えていった。さらに、子どもたちが不衛生な場所で遊ぶ姿を目にして、安全で環境にやさしい“エコトイレ”の整備にも取り組んだ。衛生環境は劇的に改善され、微生物の力で浄化し、液肥に生まれ変わった排泄物は、畑に実りをもたらすようになった。村にとって理想的な“循環”が、確かに生まれはじめていた。そして佐伯さんは、「自分たちの手で生み出す支援」の可能性を探る中で、村の女性たちのなかに、もうひとつの“種”を見つけた。それは、“針と糸”だった。

「これ、かわいい！」の聲が 村の女性たちの心に火を点けた

モン族の女性たちは、もともと刺繍の名手だ。布にびっしりと施される幾何学模様や、鮮やかな色使い、繊細な縫い目……。手間暇かけた刺繍が施された民族衣装は彼女たちの誇りであり、母から娘へと受け継がれる“文化そのもの”なのだ。「この技術、なんかに使えんかなって思ったんです」佐伯さんが最初に提案したのは、財布やペンケース、小さな巾着袋を作ってみることだった。現地で材料を調達し、サンプルを作って見せた。「こんなん作れそうか？」と聞くと、女性たちは一斉に「できる！」と答えた。ただ、実際に仕上がったものは、お世辞にも売り物にできるような代物ではなかった。「縫い目がガタガタでね、これじゃ売れん。でも、持ち前の技術はある。だったら“磨けば光る”はずなんです」佐伯さんは、縫製の基礎をイチから教えた。糸の締め方、布の折り返し、ミシンの使い方。地道な練習を繰り返すうちに、少しずつ製品の形になっていった。形になったものを日本からの訪問者や支援者に少しずつ渡していくうちに……、「これ、かわいい！」「どこで作ってるの？」そんな声が返ってきた。「そういった声を聞いたとき、村の女性たちの顔がね、パッと明るくなったんです。“私たちの作ったものが、誰かの心に響いた！”っていう実感を感じたみたいだね」現地の人たちにとって「何かを生み出すことで、それが価値を持つ」という体験は、人生で初めてのことだったのかもしれない。消費者からの反応ひとつで、村の女性たちのやる気が俄然向上した。

タイ語が話せると、世界が広がる

刺繍グループが軌道に乗り始めた頃、佐伯さんはもうひとつの“芽”にも気がついた。支援のモン族は、ラオス内戦でタイの山岳地に追われた難民の人たちで、公的教育やタ社会など政府の制度とは長らく距離があった。それ故、村に保育園を作り、給食が始まり、教育を受けた子どもたちが“タイ語を話せるようになった”というのは、

実はとてつもなく大きな変化だったのだ。そして、その姿を見た母親たちが動いた。

「うちの子が勉強しとるんだから、私もやりたい！」女性たちは自主的に“タイ語勉強会”を始めた。読み書きを練習し、役所に行く用事ができたときは自分自身で話す。「そしたらね、役場の職員が驚いたって言うんですよ。”モン族で、自分で字が書ける人なんて見たことない”って」その勉強会をきっかけに、村の中で“教える人”と“学ぶ人”が生まれた。やがて他の村からも「教えに来てくれ」と声がかかるようになった。



山岳各地の村から学校に行きたい子供たちのために作った「シャンティ学生寮」の子供たち。田植え中の寮生、ここでも自給自足で近くの学校に通学している。

どんどん拡がる「小さな成功体験」と ポジティブな空気感

こうして、エコトイレも刺繍グループも、タイ語勉強会も、すべて“自分たちでやってみたら、できた”という成功体験が原動力になって、村の中にポジティブな波動が広がっていった。

佐伯さんは言う。「どこもかしこも全部やろうと思っても無理。だから最初はひとつの村だけ、ちゃんとモデルを作る。そうすればそれが自然と周りに波及していくものなんです」今、佐伯さんが関わってきた村々では、それぞれの形で自立が進んでいる。農業で収入を得る家族もいれば、織物や果物の加工品を作って販売する女性グル

ープもいる。村のリーダーが集まって、地域会議を開くようにもなった。「もう、私がいなくても大丈夫なぐらい、みんなちゃんとやってるんです」



寮生たちの家庭訪問の様子。どの子たちも明るい笑顔で前向きだ

“いなくても大丈夫”を これからも見届けていく

村の人々に自立の精神が根付いた今でも、佐伯さんは定期的に村を訪れる。若い頃のように頻繁には通えなくなったけれど、エコトイレの技術支援や、視察のサポート、助成金の報告業務など、まだまだやることは多い。

でも、基本はもう、村人たちに任せとるんです。昔みたいに“してあげる”ことはしません。ちょっとした材料代くらいは支援するけど、それも今はほとんど現地で村人たちの手でまかなえるようになった」「多くのリーダーも育った」そう話す佐伯さんに、最後にひとつ聞いてみた。「支援してきた中で、一番うれしかった瞬間って、どんな時なのでしょう？」少し考えたあと、佐伯さんは言った。「やっぱり……、“トイレが詰まらなくなった”って言われた時かな」 たったそれだけの言葉。でも、この短い言葉の中には約 31 年分の膨大な想いと歩みが詰まっている。誰かに作ってもらったものではなく、自分たちの手で、考えて、試して、失敗して、やっと完成したもの。その“成果”

が、ちゃんと機能している。そして、それを、あたりまえのように受け入れている村の人たちがいる。「これはね、
本当にすごいことなんですよ」 「みなさん“笑顔をありがとう”」 そう言って、佐伯さんは少し笑った。

もちろん、まだまだこれから佐伯さんの北タイ村通いは続く。



豊かな自然に囲まれた北タイの山に佇む佐伯さん。これからも村々を静かに見守り支援を続けていく

(取材・文／平原千波)

ライフ DACO CO.LTD. で検索⇒ライフをクリック 3回シリーズ

DACO



～地球環境 SDGs 実践募金にご協力をお願いします～

2025.10.01 saeki